

# 鹿大ジャーナル

KADAI JOURNAL

<http://www.kagoshima-u.ac.jp/>

特集

## 離島へき地と鹿大のかかわり

鹿大「知」の探検

競走馬の関節の状態を見極める  
診断マーカーの開発

鹿大の新たな試み

日置市学習指導アシスタント派遣事業

アラムナイ追跡隊

鹿児島放送(KKB)キャスター 樺山 美喜子さん

輝く鹿大生

丸山 健太さん

鹿大見てある紀

鹿児島大学植物園

鹿大への提言

鹿児島大学監事 脇田 稔氏

なんでも情報版「みみずく」

1万7250光年先の天体計測に成功/新水処理技術開発に成功  
アジア発展途上国における口唇口蓋裂の医療診療隊 ほか



特集

# 離島へき地と

# 鹿大のかかわり

南北600キロメートルの範囲に及ぶ鹿児島県。28ある有人離島では教育、医療など生活のさまざまな面で多くの制約を強いられている。離島以外の地域でも交通の不便さなどから同じような悩みをかかえる地域は多い。鹿児島大学は離島へき地が多い地域に根ざす大学として、こうした離島へき地特有の問題を解決するためのさまざまな取り組みを行ってきた。今回の特集ではその中から3つの取り組みを紹介する。

近

年、地方での医師不足が深刻化している。有人離島数28、離島人口数・離島総面積が全国第1位の鹿児島県でも悩みは同じだ。しかし、離島へき地という限定された環境であらゆる年齢層の、あらゆる疾患の患者を診るには、相当な勉強や経験を積まなければならない。

鹿児島大学は地域に根ざす大学として、離島へき地医療充実のた

めの取り組みを行ってきた。それらを素地として、平成19年4月には「離島へき地医療人育成センター」を設置。全国の離島へき地医療に貢献する人材のトレーニングセンターとして、今後さらに離島へき地医療の充実を目指そうとしている。

まず、センター設置までに鹿大が行ってきた取り組みの具体例を見ていこう。

## 医師の派遣と巡回診療

鹿児島大学病院では、離島への医師の派遣や巡回診療を行ってきた。巡回診療は、医科と歯科の両方で実施されており、医科は平成18年度に9市町村に医師15名、看護師10名をのべ24日間にわたり派遣。20年以上前から巡回診療を実施している歯科では、平成18年度に3市町村に歯科医師21名をのべ63日間派



瀬戸内町へき地診療所の巡回診療に同行する鹿大生（与路島にて）



鹿児島大学病院の遠隔医療システム「IT Karte」を利用する下顎手打診療所の  
瀬戸上健二郎所長(中央)と小田紘医学部長(右)、鹿大生ら

鹿大の  
取り組み

## 1 離島へき地医療充実のための取り組みと「離島へき地医療人育成センター」の設置

医学部・歯学部・大学院医歯学総合研究科・鹿児島大学病院

遣し、平成19年度から学生も参加して巡回診療を行っている。

### 離島医療教育の充実

一方、医師が離島へき地で働くためには、幅広い年齢層、さまざまな疾患を診る能力がなければならぬ。そうした能力をもつ「未来の医師」を教育するための取り組みも充実させている。

国際島嶼医療学講座(旧離島医療学講座)は鹿児島県の離島医療の現状、プライマリケア(初期医療)や救急医療、予防医学を重視した教育・研究を行いながら、希望する学生に離島医療実習を実施している。

医学部では、平成19年度から6年生に対する離島医療実習が必修化された。大学病院の医科卒後臨床研修を受ける研修医には、離島の医療機関における1カ月の研修コースが用意されている。

歯学部では、5年生、6年生を対象とする離島へき地歯科医療学の授業が始まるとともに、6年生の希望者には、臨床実習の一部を離島歯科巡回診療に参加する形で進めるようにした。大学病院の歯科卒後臨床研修においても、離島歯科巡回診療に同行して行う研修が実施されている。

離島医療実習を経験した学生や

研修医はさらに幅広い勉強の必要性を痛感し、意欲が増すという。平成18年9月には「学生による離島へき地医療フォーラム」が開催された。フォーラムでは、「離島へき地医療に関する学生意識調査の分析評価」というアンケート結果を基に、将来の日本の医療を担う立場から、学生たちが本音で離島医療の問題や解決策などを話し合った。

### 地域と連携した教育支援プログラム

平成17年には文部科学省が募集した医療人教育支援プログラムに、鹿大のプログラム「離島へき地医療を志す医師教育支援」が採択された。鹿児島大学病院内の「離島へき地医療教育支援室」を中心として、鹿大と離島へき地の病院や診療所がインターネットによって連携し、学生や医師の養成を行う内容だ。

このプログラムにより、離島へき地から大学の講義を受講できる遠隔講義、eラーニングシステム、遠隔診断支援機能をもつ「医用データ管理システム(IT Karte)」などが導入された。大学病院の専門医、看護師、検査技師、薬剤師、栄養士などで構成されたサポートチームが結成され、システムの効率的な運用に一役買っている。

### \*1 卒後臨床研修

医学部か歯学部を卒業して国家試験に合格し、医師免許または歯科医師免許を取得した医師が研修医として参加する研修。実際に患者の診断や治療にあたるために必要な能力を身に付けることを目的として、医科は2年間、歯科は1年間の卒後臨床研修が義務づけられている。

離島へき地医療人  
育成センターの設置

平成19年4月、大学院医歯学総合研究科に「離島へき地医療人育成センター」が設置された。平成19年度から平成23年度までの5年間、文部科学省からの支援を受けながら、鹿大のノウハウを生かし、離島へき地医療に貢献する人材を育成する。

センターは「離島へき地医療教育プログラム開発分野」と「離島へき地医療研修プログラム開発分野」の2分野で構成されている。前者は、国際島嶼医療学講座が中心となり、

医学部学生や大学院生を対象とした教育プログラムの企画・開発を行う。後者では新しい専任教員を中心

に、現役の医師を対象としたオーダーメイド研修プログラムの企画・開発を行うが、2つの分野は常に共同してそれぞれの教育研修プログラムに取り組む。

対象に応じた  
研修プログラムを整備

センターの最大の特長は全国の学生や大学院生、医師に門戸を開いていることだ。研修プログラム

は育成の対象に応じて大きく5つに分けられている。

① 全国の医学部学生対象 夏期に短期離島へき地医療実習コースを実施する。診療所での研修のほか、講義や技術的な実習も含まれる予定だ。

② 全国の大学院生対象 実際に離島へ行き、データ収集調査や解析などを通してフィールド研究や離島へき地医療機関での臨床研究のノウハウを実践的に学ぶ高度離島へき地医療演習コースを実施する。将来、鹿児島県の離島へき地地医師を

志す学生に対しては鹿児島県の「へき地勤務医師等修学資金貸与制度」による経済的支援も行われる。

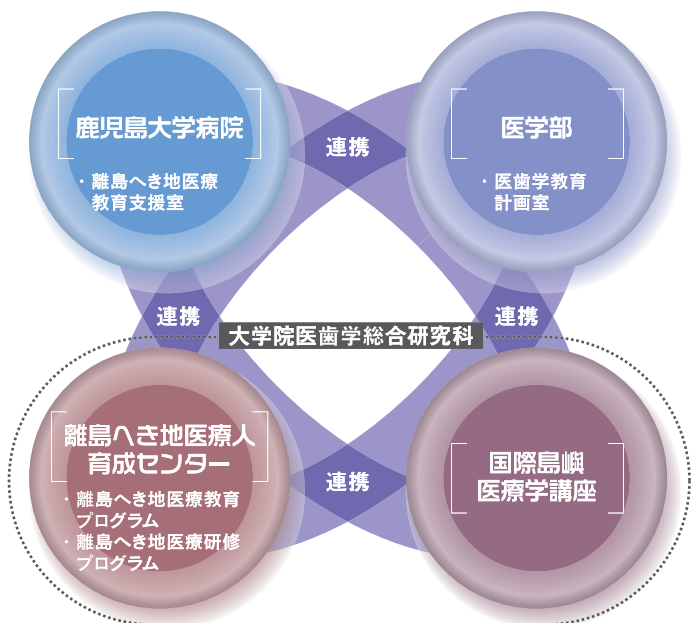
③ 卒後臨床研修を終えた医師対象 幅広い年齢層や疾患の患者に対応できるよう、プライマリケア(初期医療)に必要な外科的な研修や救急疾患に特化した研修、保健福祉を含めた地域包括医療を重視した研修を組み合わせ、離島へき地医療専門研修コースを実施する。

④ 離島へき地医療を目指す中堅医師対象 卒業後20年程度のベテラン医師には、その経験や専門を踏まえたオーダーメイド研修プログラムを提供する。センターは、研修場所となる病院や市町村との交渉、離島へき地に赴任する医師への助言も行う。

⑤ 離島へき地医療に従事している医師対象 医療人教育支援プログラムで整備されたeラーニングシステムを活用し、離島へき地にながらにして最新の知見を学べる生涯教育を支援する。

これらの研修は平成20年度から順次行われる予定だ。日本の医療を取り巻く環境は厳しさを増している。そんな中、これまで離島へき地医療の充実に貢献してきた経験を生かし、鹿児島大学は今後もチャレンジを続けていく。

鹿児島大学の離島へき地医療支援体制



離島医療の現場から

薩摩川内市下甞手打診療所長 瀬戸上 健二郎先生

手打診療所には鹿大をはじめとする全国の学生や研修医が離島医療実習に訪れます。彼らには何を教えるというより、ありのままの離島医療を体験して何かを感じてほしいと願っています。

離島医療は本物の総合診療。非常に厳しいものであると同時に、面白くやりがいのある分野です。実習に参加して「初めて医学部に入学して良かったと実感できた」と言ってくれた学生がいました。かつて実習に来ていた若者が成長して、県内外の病院で目覚ましい活躍をしています。これらは離島医療実習の成果だと思います。

離島医療は問題点ばかりではありません。都会で受ける医療にはない良さがあり、その活用が鹿大が取り組む中心テーマではないでしょうか。元鹿児島大学長の井形昭弘先生は「ローカルに徹することはインターナショナルに通じる」と言っておられ、鹿大の取り組みやその成果は、同じような悩みを抱えている多くの地域や海外の国々に役に立つ国際性があります。今後の鹿大の取り組みに大いに期待しています。



十島村諏訪之瀬島でのブロードバンド体験教室

## 2 情報過疎地域でのブロードバンド整備を目指して

～条件不利地域におけるコミュニティ・ブロードバンドの整備に関する研究～

学術情報基盤センター

事業者や自治体による整備はほぼ不可能。技術的には可能であるにもかかわらず、ブロードバンド未整備の地域もあるのが現状だ。

### 住民負担で「コミュニティ・ブロードバンド」

鹿児島大学学術情報基盤センターでは、離島へき地の地域住民が主体となつて、自治体や通信事業者に頼らずに低コストでブロードバンドを整備する「コミュニティ・ブロードバンド」の研究を進めている。それが「条件不利地域におけるコミュニティ・ブロードバンドの整備に関する研究」だ。この研究は平成18年度

総務省「戦略的情報通信研究開発推進制度」に採択され、平成20年度までの3年間で実施される。

### 産学連携による技術開発・実証実験

鹿児島県内でブロードバンド未整備の地域市町村は、十島村と三島村だけ。研究はこの2つの自治体の5つの島々で行われている。鹿大と富士通鹿児島インフォネット、NTT西日本・南九州が産学連携して、技術開発や実証実験にあつている。

コミュニティ・ブロードバンドでは、各島に数回線しかない既存の

NTTの専用回線、もしくは衛星通信事業者社J-SATの衛星回線を、電器店でも購入できる安価な装置を使って島内で共用する。1回線の使用料を世帯数で等分して、1世帯あたりの負担額を5千円程度で済ますことを目指している。実証実験は既に成功し、研究地域の住民は日常的にブロードバンドによるインターネットを利用できる状態となつている。

研究には鹿大の学生・大学院生も参加している。コミュニティ・ブロードバンドやブロードバンドについての理解を深めてもらうことを目的とした「ブロードバンド体験教室」の説明員や、住民アンケートの実施、回線の評価や測定などを担当している。

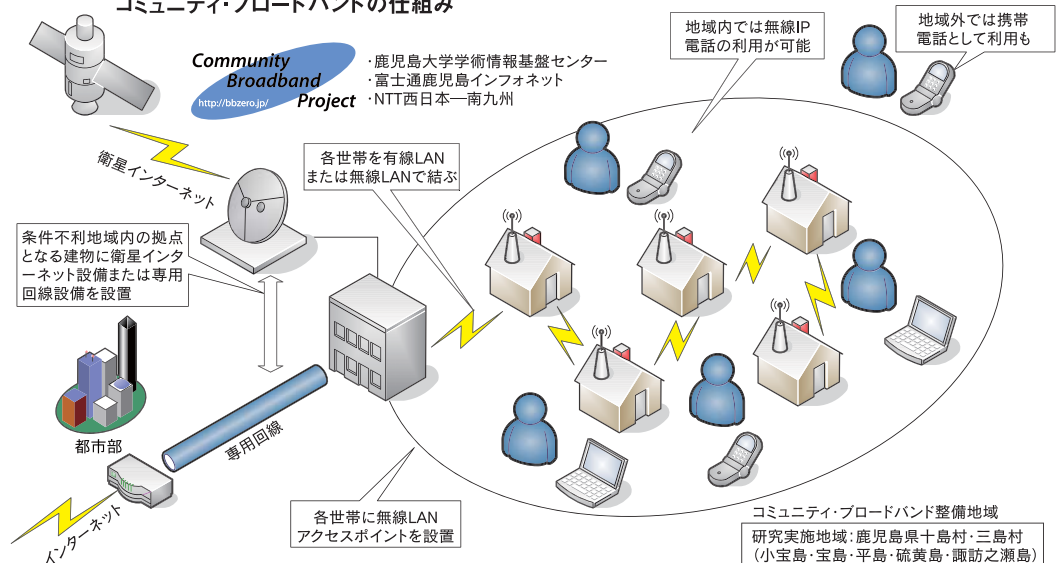
### 情報過疎地域の整備モデルとして

平成21年度以降は、住民が中心となつてブロードバンド環境を維持する予定だ。「安価で単純な機器を使用するから、整備や修理は簡単。住民で機器の整備ができるようにしたい。鹿大としても技術支援を続ける」と学術情報基盤センター長の升屋正人教授。こうした取り組みは、日本や国内ばかりではなく海外の情報過疎地域におけるブロードバンド整備のモデルともなりうる。

### コミュニティ・ブロードバンドの仕組み



無線LANアンテナの設置



コミュニティ・ブロードバンド整備地域  
研究実施地域：鹿児島県十島村・三島村  
(小宝島・宝島・平島・硫黄島・諏訪之瀬島)



鹿児島大学教育学部附属小学校の複式学級における研究授業の様子

教育の現場から

中種子町立  
星原小学校 内 芳文先生

全校児童24名の星原小で、5・6年生の複式学級の担任をしています。現場に出て初めてわかることも多く、勉強の毎日です。授業の始めに「めあて」を決めて、やることを明確にするよう心がけています。また、子どもたちを直接見ることができない時間はワークシートなどを使い、何をしたいかわからない時間がないようにしています。

鹿大の先生方がそれぞれの専門の立場から複式授業の研究や指導法の開発に関わるのは、とても良いことですし、心強いですね。複式学級の指導は大変ですが、面白さもあります。全校生徒と仲良くなれるし、一人ひとりにかける時間が長くなるため、それぞれの子どもが苦手としていることも把握して補強できる。手立てさえあれば、子どもの能力を伸ばせる環境だと思っています。

### 3

鹿大の  
取り組み

## 三大学の連携による離島へき地校での教科指導力向上のための教育課程の編成

～大学教員と小・中学校教員の相互訪問授業を軸として～

### 教育学部

鹿

鹿児島大学教育学部では、長崎大と琉球大の教育学部と連携し、「離島・へき地教育革新への三大学教育学部連携協力事業」に取り組んできた。「新しい時代の要請に応える離島教育の革新」をテーマにしたこの事業は文部科学省の特別教育研究経費の支援を受け、平成17年度から平成18年度まで行われた。

長崎県、沖縄県、鹿児島県には多くの離島がある。離島の小・中学校の多くは小規模校であり、異なる学年の児童・生徒が同じ教室で学ぶ「複式学級」が多い。鹿児島大、長崎大、琉球大の三大学の教育学部は複式学級での授業、eラーニング、離島の子どもの成長・発達、地域を活用した平和教育などについて共同研究を進めてきた。

鹿大は「離島に多い複式学級の授業充実」の研究テーマ幹事校として、複式教育の課題発掘、直接指導と間接指導がうまく組み合わされた複式授業の成果を単式学級での習熟度別指導に生かす研究などを担当した。複式学級では一人ひとりの子どもたちに目が届くため学力が高く、子どもたちに主体的

#### 離島に多い複式学級の授業充実

な学習習慣が身につくといった利点などが2年間の研究で明らかになっている。

研究成果は、教員養成や小・中学校の教員の研修に生かし、「複式学級指導法」という新しい科目としてもまとめられた。この科目では鹿児島大学教育学部の教員が講義をするが、ゲストティーチャーとして複式学級を担当している教員も講師として迎え、学生により詳しく複式学級での指導の実態を伝える時間も設ける予定で、教育の現場で役立つ内容となっている。

三大学による共同研究は今年度から新たな段階へと進んでいる。それが「三大学の連携による離島へき地校での教科指導力向上のための教育課程の編成」大学教員と小・中学校教員の相互訪問授業を軸として「だ。文部科学省からの支援を受け、平成19年度から平成20年度までの2年間で実施される。

#### 大学と現場の教員が協力する相互訪問授業

この取り組みの最大の特徴は、大学の教員と小・中学校の教員の相互訪問授業。大学の教員が小・中学校で行われている授業を見学・研究し、課題やその解決策を大学と教育の現場で共に考える。各教

## リーガルクリニック I

司法政策研究科  
(法科大学院)

鹿児島大学法科大学院の2年次必修科目「リーガルクリニック I」では、学生は3泊4日で屋久島か種子島に滞在し、弁護士の同席のもとで住民を対象とした法律相談を行っている。学生は相談内容の聞き取りや弁護士の対応などを現場で体験。理論と実務を結びつける場として役立っている。

この科目には教育だけでなく、社会貢献としての性格もある。実習先となる屋久島と種子島は弁護士が一人もいない「司法過疎地域」。そこへ弁護士を派遣することで、住民の相談事や悩み事を聞き、必要があれば派遣された弁護士自身が事案を担当する。今後は徳之島など他の離島にも学習の場を広げることも視野に入れている。

鹿児島大学法科大学院は、平成21年度までに法科大学院附設の法律事務所を設置し、リーガルクリニック I や司法過疎地域への対応を行う拠点として機能させる予定だ。

## 奄美サテライト教室

人文社会科学研究所  
教育学研究科

平成16年、旧名瀬市(現在の奄美市)に設置された奄美サテライト教室では、鹿児島大学大学院人文社会科学研究所と教育学研究科の講義を正規授業として受講することができる。受講生は科目等履修生として講義を受け、受講した科目は単位認定される。正規の大学院生として学ぶこともできるため、科目等履修生から大学院に入学する例も出ている。目標は奄美群島に修士号をもつ人材を送り出すことだ。

平成19年度からは徳之島分室も開設され、現在7名の受講生が学んでいる。鹿児島キャンパスで行われている正規の講義に加え、社会人のキャリアアップに役立つことを企図し、サテライト教室独自の授業科目「奄美プロジェクト」も新設。離島にいながらにして高度専門教育を受けることができる全国でも類を見ない試みは、地元の協力と受講生の向学心に支えられ、発展し続けている。

科に合わせた指導方法を開発し、教科ごとの指導力向上を目指すのがねらいだ。一方、小・中学校の教員をゲストティーチャーとして大学の講義に招き、教育現場での自らの体験を学生に直接伝える試みを行う。

この研究には大学院生も加わる。大学院生は大学の教員に同行して小・中学校で授業見学や模擬授業を行い、現場での学習指導を体験しながら教材の検証などを担当する。

平成19年度末には沖縄でシンポジウムが開催され、取り組み1年目のまとめを行う予定だ。将来は、三大学で複式学級の指導法をまとめたパンフレットを出版し、成果を全国に還元する構想もあたたためている。近年、都市化などの影響により、都市周辺部でも複式学級を持つ学校が出現しつつある。今後は離島へき地だけでなく、全国で

### 研究の成果を全国に還元

鹿大の複式授業のノウハウが必要とされる時代がやってくるかもしれない。離島へき地の教育充実を目指して大学と教育現場が連携し、その成果を双方で分かち合う研究は、極めて少ない。鹿大をはじめとする三大学が連携して複式学級の利点をアピールするとともに、離島へき地で十分な指導ができる学生の養成、現場の教員の研鑽に役立つことが期待されている。

### 離島へき地の問題解決におけるフロントランナーとして

鹿大は8学部10大学院研究科をもつ総合大学。一つのテーマをあらゆる観点から探究できる人材や環境がそろっており、こうした取り組みは今後さらに増えることだろう。鹿児島県の島嶼地域には、問題ばかりでなく生活、歴史、文化などの面で他に見られない特色がある。これらを鹿大が研究し、その成果を普遍的なレベルにまで高めれば、地域貢献だけでなく国際貢献も可能だ。冒頭で紹介した離島へき地医療の分野では、鹿児島県と同じく多くの島嶼地域をもつ国々の医師を対象に、鹿大がもつ離島へき地医療のノウハウを伝える取り組みが行われている。

独自の文化を育みながら医療や教育の問題を抱える離島へき地は、「日本の縮図」である。離島へき地の問題を考えることは、今日の日本の問題、日本の将来を考えることにつながる。鹿大発の取り組みを皮切りに、全国、ひいては世界各地で同じ悩みをもつ地域に貢献することは鹿大の使命ともいえるだろう。

離島へき地の問題解決におけるフロントランナーとして鹿児島大学はこれからも走り続ける。

# 競走馬の 関節の状態を見極める 診断マーカーの開発

三角一浩教授は競走馬の外科手術の第一人者だ。院長を務める鹿兒島大学農学部附属動物病院では競走馬の手術を受け入れている。この実績が認められ、平成20年度には馬専用の手術棟の建設が決定した。三角教授の研究や教育などについて紹介する。



競走馬の手術風景。手際よく手術を始められるよう、トレーニングを積んだ学生がサポートを行う。麻酔で寝かされた馬はホイスト(クレーン)でつり上げられ、手術台に載せられる

農学部附属動物病院長  
農学部獣医学科家畜外科学講座 教授

## 三角一浩

みすみ・かずひろ／昭和39年鹿兒島県枕崎市生まれ。鹿兒島大学農学部獣医学科卒業。北海道日高の軽種馬農協での勤務を経て、平成7年山口大学大学院連合獣医学研究科臨床獣医学専攻修了。大学院在籍時には、鹿屋市にあった軽種馬育成センターに勤務。平成8年9月鹿兒島大学農学部講師、平成14年4月同助教授、平成18年4月から現職。専門は獣医外科学。

郡元キャンパスにある鹿兒島大学農学部附属動物病院。ここでは家庭で飼われている犬や猫の治療だけでなく、競走馬の外科手術も行われている。競走馬の手術ができるのは、日本中央競馬会(JRA)の関係施設を除けば国内に4カ所。その一つが鹿兒島大学農学部附属動物病院である。全国の獣医科系大学の中でも競走馬の手術を行う獣医師がいるのは、鹿大と帯広畜産大の2カ所、日常的に手術を行っているのは、鹿大だけである。

鹿兒島大学農学部附属動物病院では、関節症や喉頭疾患にかかった競走馬の手術を年間約30頭受け入れてきた。競走馬は、遠くは東京・名古屋の地方競馬からトラックに乗せられて手術を受けにやってくる。その執刀にあたるのが、動物病院長を務める三角一浩教授だ。

### 馬の獣医を志した幼少時代

三角教授が幼いころ、学校に通う途中に馬を飼う家があった。毎日のように馬を見たり、馬に乗せてもらったりしていたせいか、「馬の獣医になりたい」と考えていたという。

鹿兒島大学農学部獣医学科卒業後は、競走馬の生産(繁殖)を行う北海道の日高の軽種馬農協に獣医師として勤務し、子馬や繁殖牝馬、種

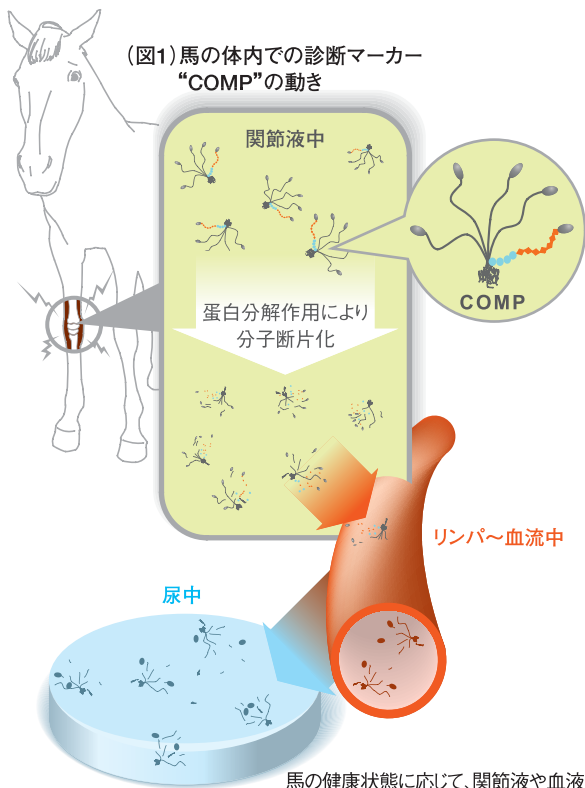


牝馬の暮らしと疾患について学んだ。  
山口大学大学院連合獣医学研究科の博士課程在学中は、数々の名馬を育てたことで知られる鹿児島県大隅半島にあった軽種馬育成トレーニングセンターで働きながら、育成馬の水泳調教を中心とした調教トレーニング法の研究を行い、学位論文を仕上げた。

### 早期診断が可能となる 診断マーカー

三角教授は競走馬の関節症に関する研究を行っている。競走馬になる馬は子馬のときからトレーニングを積むが、トレーニングの負担が強すぎると軟骨が壊れたり、骨折したりする。トレーニングで馬が体を壊してしまつては元も子もない。馬は関

節や腱、靱帯がいちばん痛みやすい動物。これを防ぐためには的確な早期診断が欠かせません。また病氣や怪我の回復具合を診る予後診断も大切ですよ」と三角教授。現在行っているのは、馬の関節の状態を判断する指標となる「診断マーカー」の開発だ。診断マーカーとなるのは、軟骨に多く含まれるCOMPという物質。例えば、馬の関節に衝撃が加わったり関節症にかかったりすると、軟骨からCOMPがしみ出て小さな断片に分かれ、関節液の中に流れ込む。それはリンパ系を經由して血液の中に混じり、やがて腎臓で濾過され、尿中に出てくる。関節液や血液、尿に含まれるCOMPを定量すれば、その値によって馬の関節の状態が把握できるのである(図1)。



馬の健康状態に応じて、関節液や血液、尿中のCOMPの量を調べる。COMPの値によって、関節症の病期(病気の進み具合)の診断が可能になる。

現在、関節症の進行具合によって、COMPが馬の体内でどのように動くかを調べている。COMPの体内動態が明らかになり、その測定方法が確立されれば、関節症の早期診断が可能となる。COMPの値を見ながら適切なトレーニング方法を見極めることもでき、より速い馬が長期間、競走馬として現役で活躍することができるようだ。

今後、関節にかかわる疾患の解明をさらに進めるため、軟骨の下にある骨や骨同士を連結している靱帯、関節を包み込んでいる関節包などにまで研究の範囲を広げる予定だ。

### 馬を学ぶことは獣医学の原点

三角教授は鹿大で麻酔や手術を教える獣医外科学関連の科目や臨床獣医学特論、動物病院実習を担当している。研究室の学生は現在13人で、馬専門の獣医を目指す学生もいる。学生たちはそれぞれの研究のほか、三角教授の手術のサポートも行う。

「日本の獣医学というのは、戦時中、馬が軍用馬として大切にされていたことから始まったもの。馬について学ぶことは獣医学の原点ですから、誰かがきちんと教えなければと思ってます。馬の診療や手術ができる獣医師をここで育てていきたいですね」

と三角教授は話す。近年、競馬以外にも乗馬の人気やホースセラピーの浸透などによって、馬が日本人の生活の中で活躍する場が増えている。そういう意味でも、馬に関する教育・研究は今後さらに重視されるだろう。

### 数少ない馬専門の獣医師として

来年、動物病院正面に馬専用の手術棟が完成する。競走馬の外科手術の実績が認められ、(財)全国競馬・畜産振興会から建設費が補助されることになったのだ。新しい設備の導入で、これまでできなかった開腹手術が可能となり、手術件数だけでなく治療できる疾患の種類も増える。

鹿児島県をはじめとする南九州は、北海道に次ぐ競走馬の産地だ。手術棟の完成によって鹿児島がより馬の治療に適した場所となれば、暖かい気候を生かした調教が盛んになり、鹿児島に来る馬の頭数も増えるだろう。近年では鹿児島から韓国や香港向けに日本の競走馬を輸出することが増えており、鹿児島は競走馬輸出の拠点としての役割も大きい。手術棟が整備されれば、そうした馬のケアや技術指導を鹿児島大学が主導で行うことも増えるかもしれない。日本の大学でも数少ない馬専門の獣医師として、三角教授の活躍に注目が集まっている。

\*2 山口大学大学院連合獣医学研究科 平成2年4月に鹿児島大学、鳥取大学、山口大学、宮崎大学の4校が連合して設置された修業年限4年の博士課程。基幹校は山口大学。1専攻(獣医学専攻)3連合講座(基礎獣医学、病態・予防獣医学、臨床獣医学)から成る。

\*3 軽種馬 競走馬や競技馬、軍用馬などのこと。重種馬は農耕や重量物の運搬用に改良された馬を指す。



日置市立住吉小学校の5・6年複式学級でTAを務める岩田祐生さん(教育学部学校教育教員養成課程教育学専修4年)。担任教師が5年生(写真奥)に直接指導を行う間、岩田さんは6年生の自主学习を手伝う

鹿大の新たな試み

Challenges of  
Kagoshima  
University

# 担任教師の補助役として 複式学級に学生を派遣

～教育学部の「日置市学習指導アシスタント派遣事業」～

今年度から鹿児島大学教育学部の学生・院生が、日置市の小学校で複式学級の学習指導補助を始めた。複式学級での指導を実践的に学ぶことを目的としている。派遣先の小学校にとっては、学生の補助によって授業がさらに深まるというメリットがあり、学生だけでなく派遣先の小学校からも好評だ。

平成19年5月から、複式学級のあ  
る日置市内の6つの小学校すべて  
に鹿児島大学教育学部の学生・院生  
が派遣されている。彼らは「学習指  
導アシスタント(Teaching Assistant  
略してTA)」。複式学級で担任教師  
のサポートをしながら少人数教育  
の現場を体験し、子どもへの接し方  
や授業の進め方などを学んでいる。

この日置市学習指導アシスタ  
ント事業は、鹿大と日置市教育委員  
会、日置市内の複式学級を持つ小  
学校6校が連携して行っている。

きっかけは  
「いちき青松塾」への学生派遣

事業のきっかけは、鹿大の教育  
学部が平成16年から旧市来町の依  
頼を受けて学生の派遣を始めた「い  
ちき青松塾」(現在はいちき串木野  
市青松塾)である。青松塾は毎週土  
曜日、希望する児童・生徒に学習活  
動や野外体験学習をさせる活動。  
教育学部はこの活動を手伝うボラ  
ンティアの学生を学内から募って  
いたが、予想を超える数の学生が  
参加を希望したことから、学生た  
ちが教育実習以外にも子どもたち  
とかかわる場を求めていることが  
わかった。教育学部の学生が教育  
実習以外で教育現場を体験する機  
会は、意外と少ないのが現状だ。

学生と市教委のニーズを  
満たす取り組み

平成18年3月、日置市教育委員  
会から「日置市でも学生と共同で  
子どもたちを支援する取り組みを  
始めたい」と教育学部に打診があり、  
その話し合いの中で出てきたのが  
「学生による複式学級での学習指  
導補助」というアイデアだった。教  
育学部では、このアイデアが教育  
の現場をもっと体験したいと望む  
学生と日置市のニーズを満たすも  
のと判断。平成19年1月には試  
行として初めて学生が派遣され、好  
評だったことから、派遣事業が本  
格的に始まった。

鹿大の教育学部では、「学校環境  
観察実習」を希望する1年生を対  
象に奄美大島の複式学級での授業  
観察の場を提供している。今回の  
事業では、学生が複式学級を受け  
持つ担任教師のアシスタントとし  
て実際の指導にかかわる。教育実  
習以外で複式学級の指導を実践的  
に学べる制度は、全国でも珍しい  
試みだ。

複式学級に派遣される  
学生の役割

前期は13名の学生と院生がTA  
として派遣された。TAとなるには  
小学校の教育実習を終えているこ

## <日置市学習指導アシスタント派遣事業に参加して>



教育学部学校教育教員養成課程  
音楽専修4年 川路 涼子さん

鹿児島県の教員になると、必ず小規模校に赴任する日がやってきます。その日のためにもっと複式学級のことを知っておきたいと思い、この事業に参加しました。

私が派遣されたのは、全校児童15人の扇尾小学校です。5月から7月まで週1回、算数や国語、11月の「扇尾小フェスティバル」で子どもたちが披露するオペレッタの指導補助を経験しました。

職員室に出入りしたり、職員朝会に参加させてもらえたりしたことで、教師同士の助け合いの大切さや、教師にはクラスを教えること以外にも細かい役割分担があることを知りました。教育実習ではわからなかったことがわかる、とてもいい経験だったと思います。



日置市立扇尾小学校  
5・6年生複式学級担任 中熊 豊仁先生

TAの学生が来ると、子どもたちの目がキラキラと輝くんですよ。学生が来るのを楽しみにしているんだなあ、ということが良く分かります。

学生がとても意欲的なので、私たち教師も刺激を受けました。将来、私たちの後輩となる学生たちには、複式学級とはこんなところだよ、というのをできるだけ見せてあげたいと思っています。また、鹿大の学生がTAとして扇尾小に来るのを楽しみにしています。

私の学生時代は、複式学級での指導法を学ぶ機会はありませんでした。学生のうちに複式学級での指導を実践的に学べるのはいいことですね。



日置市立扇尾小学校 6年  
諸正 真依さん、岩井田 光梨さん

TAの先生は国語、社会、算数、理科の時間に来てくれました。TAの先生がいると、担任の中熊先生が5年生を教えている間にわからないことがあっても、すぐにTAの先生に質問できるのがいいと思います。

授業以外では昼休みに「ひまわり」というゲームや鉄棒をして一緒に遊んだり、朝のランニングをしたり、ランチルームで先生と一緒に給食を食べたりしました。大学の先生や勉強のことについておしゃべりしたこともあります。

また、鹿児島大学からTAの先生が来てくれると嬉しいです。

とが条件。週1、2回程程度の派遣にかかる交通費は、日置市教委が1日2千円を負担する。TAは、空いている日時を派遣先の学校に連絡し、日置市教委と各学校がすり合わせをした上で、どの学校へいつ派遣されるかが決定する。

複式学級では担任教師の直接指導と間接指導を組み合わせ、授業が進められることが多い。例えば、5年生と6年生のいる学級で担任教師が5年生を直接指導している間、6年生は自分たちの考えをまとめる作業や、練習問題を解くなどの自主学習を行う。その時間が終わると、今度は担任教師が6年生の直接指導に入り、5年生が自主学習を進めるという具合だ。ただ、自主学習の間にはわからないことや聞きたいことがどうしても出てくる。TAはそうした子どもたちの個別指導を行う。TAの存在によって子どもたちは安心して学習を進めることができ、担任教師はもう一方の学年の指導に集中することができる。TAは学生自身の勉強になるだけでなく、小学校側にも良い影響をもたらすといえよう。

これまでに4名のTAを受け入れた扇尾小学校の上野文治校長はこう話す。「鹿大が複式学級の研究や支援に熱心なのは非常にありが

たい。小規模校では子どもをのびのびと育てるだけでなく、しっかりとした学力をつけてあげることが大切。TAの学生たちは授業の補助に加え、自分の専門や特技を生かして歌や運動を教えるなど、十分な指導をしてくれた。また、生徒指導面や学校行事等、学校の活性化に大変役立っている。若くてやる気いっぱいの子が来ると、教師たちも今まで以上に準備して授業に臨むようになる。学生が有意義な時間を過ごせるよう、私たちもさらに努力していきたい」。

### 複式教育経験のある 学生を教育現場へ

現在は20名の学生・院生がTAとして小学校に通っている。派遣事業の担当教員である教育学部の土田理教授は「学生がある程度 of 経験を積んで、卒業後なるべくスムーズに教育の現場に入れるよう、このような取り組みは必要。将来の単位化も視野に入れる必要がある。教育学部としても複式学級の実態を知ることが、大学での演習や講義の内容を考えるのに役立つ」と大学側の意義を話す。学生時代に複式学級や小規模校の良さを現場で学んだ学生が、教育現場の即戦力として活躍する日は近い。

※「アラムナイ」とは英語で同窓生のこと。各界で活躍する鹿児島大学の卒業生や留学生などのユニークな活動を紹介します。

アラムナイ追跡隊

interview  
**Mikiko  
KABAYAMA**

今はこの仕事が  
本当に面白いんです。



樺山さんがキャスターを務める「KKBスーパーJチャンネル」の撮影スタジオにて

鹿児島放送 (KKB) キャスター **樺山美喜子さん**

● profile

1969年生まれ。鹿児島県出身。鹿児島県立中央高等学校を卒業後、鹿児島大学理学部生物学科(現 生命化学科)入学。1994年3月同大卒業後、同年4月株式会社鹿児島放送(KKB)入社。報道部記者、同デスクを経て、2006年4月から夕方方のニュース番組「KKBスーパーJチャンネル」でキャスターを務めている。報道制作局報道部副部長。

## 就職活動は早い時期から始めていた

中学生や高校生のとき、将来何になるかなんて全然決めていませんでした。鹿大に入ってからそれもそれは変わらなかつたですね。ただ、私の友だちが就職活動にとても熱心で「早いうちから就職活動をやったほうがいいよ」と聞かされていたので、3年生のときから県内の企業を直接訪ねて、資料をもらって回っていました。その中にマスコミ関係の会社も入っていました。

KKBに資料をもらいに行った当時の総務部長さんとお話をすることができたり、先輩が制作のディレクターとして勤めていたこともあり、KKBには何となく親しみを感じましたね。明確に「マスコミに就職したい」と決めていたわけではないので他に内定をもらった会社もありましたが、最終的には印象の強かったKKB



学生時代の榊山さん。手に持っているのは実験で使っていたアフリカツメガエル。卵割のメカニズムについて研究していた

に決めました。就職活動でいろいろな人と出会って話をしていくうちに絞り込まれていったという感じです。当時、放送されていた久米宏さんの「ニュースステーション」が好きだったことも理由の一つでしょうか(笑)。

## 報道記者、デスクを経てキャスターに

入社後は報道部に配属され、ニュースや特番の取材を担当していました。いろいろなところに取材されているネタでも、食い下がって独自の情報を引き出せたときはやりがいを感じます。

取材していると分からないことも出てくるんですが、そういうときは鹿大へ行ってお世話になった先生方に教えてもらうんですよ。私にとって、鹿大は「宝箱」のような存在。卒業してからもかわいがっていたら、とてもありがたいなと思います。

丸10年、報道記者を経験した後、2年ほどデスクの仕事と記者と並行してやっていました。ところがある日、上司から「ニュースを読むほうをやってみない？」と言われたんです。デスクとして視聴率対策や番組内容の改善などを必死にやっていたつもりだったので、

「私はデスクとして駄目なのかもしれない」とショックで。その上司は「そろそろキャスターを替える時期だし、もっと番組に記者の視線を入れたい」と言ってくれました。いろいろな人から「やってみなさいよ」「面白いかもよ」と励まされ、挑戦してみる気持ちになったんです。

アナウンサーは、番組で自分の感情を出してはいけないと教えられるそうなんです。私はある程度出てしまおうし、出してもいいかなと思っています。自分の意見を表に出すことには怖さもあります。いろいろな声があるということとを伝えたくて。記者の言葉でニュースを伝えることはなかなか難しいのですが、今はこの仕事が本当に面白い。視聴者の方が共感できるような番組、幅広い年代の人たちにとって分かりやすいニュースをつくりたいと思っています。

## 学生のうちに外的世界を見てほしい

大学2年生の時、全国の理学部系の学生を対象にした研修に参加したことがあります。生物を学ぶ学生が全国から参加していて、「同じことを学んでいる仲間がこんなにいるのか」と驚きました。鹿児島



天文館の帽子デザイナーの方を取材する榊山さん

には鹿大の理学部しかないから、外に対する意識が芽生えない。でも、県外に出たらいろいろな学生が頑張っている。鹿児島にいるからこそ扱える生物を県外の人から教えてもらったこともあり、地元の価値を再発見できた気がします。学生のうちに外的世界を見たほうがいいですよ。同じ年代の人とばかりいないで、違う世界の人や大人と話してみることが大事。普段のポジションから少し足場を変えてみるだけで、今まで自分がいた環境の価値が分かりますから。今、社会人の生涯学習が盛んですが、社会人は評価がシビアで勉強にも熱心。学生はうかうかしていたら、社会人の方に先生たちをとられちゃいますよ。必死に勉強して先生を取り返してほしいですね。



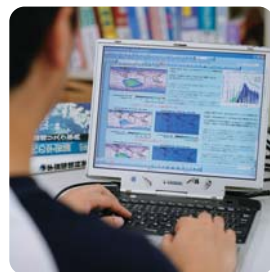
錦江湾公園(鹿児島市平川町)にあるH2ロケット模型と丸山さん



研究者として、宇宙飛行士として  
未知なる宇宙の姿を明らかにしたい。

丸山健太さん

理工学研究科 博士前期課程2年  
物理科学専攻 宇宙情報講座  
[福岡県出身]



データの解析を行っている丸山さん

毎年非常に多くの学生が志願する難関を突破し、来年4月に独立行政法人宇宙航空研究開発機構(JAXA)への就職が内定している丸山さん。現在は鹿大とJAXAの連携大学院にて研究を行っている。[学部3年生の後期からJAXAと共同し人工衛星「つばさ」の観測データを基に地球周辺の放射線環境の調査を行っています。膨大な量の観測データから解析した結果が図や表として目に見える形にまとまり、それを考察することが研究の面白い部分です。これから修士論文に向けて、研究にますます熱が入りますね]

幼い頃、鹿児島島の祖父の家で天の川を見たことがきっかけで宇宙に興味を持つようになった。大学で宇宙の研究がしたいと考えていた高校生の時、鹿大と国立天文台が共同で進めているVERA計画<sup>\*2</sup>の計画のことを知った。

「計画の内容に興味をもち鹿大に入学しました。学部2年生まではアルバイトやサッカーサークルに打ち込み、本格的に研究を始めたのはVERA計画を進めている面高俊宏教授の研究室に入った3年生の時。鹿大の農学部附属農場入来牧場内にある大型電波望遠鏡を自ら操作し、その中で難しい観測や解析について山ほど勉強しました。研究設備の整った鹿大だからできた経験で、その時身に付いた基礎知識は今でも役立っています」

今の目標はJAXAで宇宙開発の安全と信頼保障について研究し、少ないコストでより安全で信頼できるロケットの開発、打ち上げを目指すこと。

「いつかは、自分自身でロケットに乗り込み宇宙に行きたいと思っています。JAXAへの就職はその第一歩。夢を実現させるため、努力し続けます」



「ナンバー1よりオンリー1」  
この言葉をモットーに、ナンバーワンになることにこだわらず、常に自分らしくいることを大切にしています。



平成19年6月から8月にかけて、中国で行われた国際宇宙大学サマーセッションプログラムにて日本人女性初の宇宙飛行士、向井千秋さんと

私の座右の銘

ナナイロコトバ

\*2 VERA計画

鹿大と国立天文台が共同で、天の川銀河の精密立体地図づくりを目指している研究のこと。本誌P.17にVERA計画の関連記事があります。

\*1 連携大学院

JAXAと大学が協定等を締結し、大学から教授などを委嘱されたJAXAの研究者が、担当学生を受け持つ制度。大学院生はJAXAにおいても研究(学位論文を含む)指導を受けることが可能になる。

鹿児島大学キャンパスあんなに  
Welcome to our Campus

## 「鹿児島大学植物園」



▲ケラマツツジ



◀シマウリノキ



▼ヤクシマサルスベリ

南西諸島固有種の花々

## 樹木のフィールドミュージアム

鹿児島大学植物園は、郡元キャンパスにあります。鹿大正門を入って左へ進めば、そこが樹木のフィールドミュージアムの入口です。

植物園は、明治42年の農学部の前身である鹿児島高等農林学校の開校に際し、初代校長だった玉利喜造の命で計画されたのが始まりです。それから約10年後の大正8年ごろ、約1ヘクタールの分類式花壇として完成しました。鹿児島大学植物園は今年で88年の歴史を経たこととなります。

88年の歴史の中で最も大きかった出来事は、第二次世界大戦の戦災によって壊滅的な被害を受けたことです。しかし、戦後まもなく学生や教職員の手により整備が図られました。とりわけ、昭和24年に新制大学となつてからは、当時の農学部林学科造林学教室の初島住彦教授(鹿児島大学名誉教授)や迫静雄助教授(故人)が中心となり、主に南西諸島の樹木の採取、植え込みと整備が行われ、現在の植物園の特色が形づくられました。



図鑑「鹿児島大学植物園の樹木たち」(「鹿児島大学植物園の樹木たち」編集委員会編、2004年)。郡元キャンパスの鹿児島大学生協書籍部で購入できます

植物園には南九州の植物や南西諸島固有の植物、そして戦前に植栽された北アメリカなどの外国産の樹木も多数植栽されており、学生や大学院生の樹木実習の場として活用されています。また、豊富な樹種を目当てに種々の渡り鳥たちが集い、地域の方々も散歩や自然観察に訪れています。昨年11月の大学祭では、学生ボランティアによる植物園を利用したウォークラリーが企画され、来場者からは好評でした。

今後は台風などで消滅してしまった樹種の補植を精力的に行うなど、園内の整備をさらに進める予定です。また、植物園を中核として各キャンパスに植えられている樹木のネットワークを作り、幅広く質の高い教育・研究ができる場を目指していきます。街中のフィールドミュージアム、鹿児島大学植物園にぜひ足を運んでみてください。



昭和10年撮影の植物園の写真。当時は花壇状に植栽されていた。昭和天皇の行幸に備え、園内はほうきで掃き清められている(鹿児島高等農林学校発行「行幸記念誌」より)

### <鹿児島大学植物園>

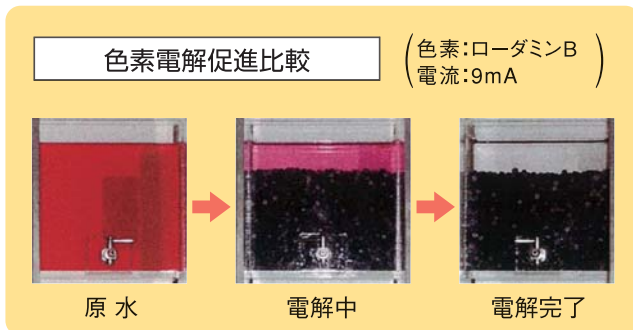
開園日時：9:00～17:00(年中無休)  
観覧料：無料



## ▶ 早川教授研究グループが 新水処理技術開発に成功

理学部の早川勝光教授は、(財)かごしま産業支援センターの支援を受け、(株)サタコンサルタンツとの共同研究で、「シラス基材のハイブリッドセラミックス触媒」(特許:第3939800号)\*の溶存有機物の分解力に着目し、「水中有害物質の分解と無害化」を可能とする水処理システムの開発に成功しました。光照射しないで分解する触媒システムであるために、添加物が不要で污泥や副生成物も発生しません。したがって、排水を用水として再利用することができます。施設は、触媒充填槽に汚水を流して通電するだけで、広大な敷地や多大な建設・維持管理コストを必要としません。小規模システムが可能ですので世界各地の水質浄化に貢献できます。家畜尿尿の一次処理排水や地下水中の硝酸イオンの分解除去のための実証試験を完了し、次年度初めの稼働を目指し、営業活動と顧客のニーズに適したシステム設計を実現していく予定です。

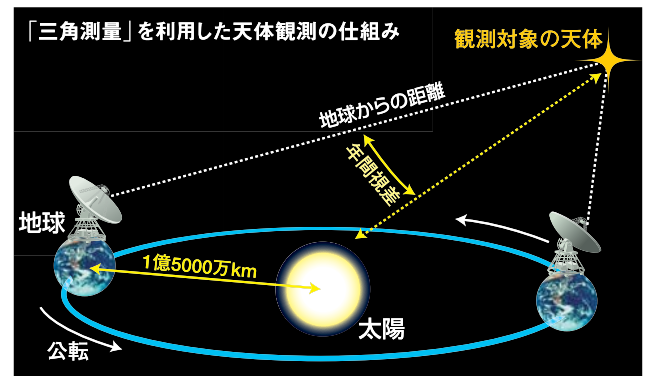
\*鹿児島県工業技術センターと(株)西日本環境工学との共同研究により開発されたもの



## ▶ 理学部研究グループ、 1万7250光年先の天体計測に成功

鹿児島大学理学部や国立天文台の研究チームは、鹿児島大学入来牧場など国内4カ所の電波望遠鏡を同時に結んだ天文広域精測望遠鏡(VERA)を使い、地球が太陽の周りを回る間に、狙った星の見える角度の変化(年周視差)を利用して距離を測る『三角測量』の手法で(図参照)、オリオン座の近くに見える天体S269までの距離が地球から約1万7250光年であることを突き止め、東京で記者会見しました。

これは人類史上最も遠い天体の距離の直接計測となります。1992年から、この計画実現に奔走してきた鹿児島大学の面高俊宏理事は「今後10年かけて銀河系の1000個の星までの距離を測り、銀河系の宇宙地図作りを成功させます。さらにVERAで星を観測することで星が銀河系を回転する速度を求め、現代天文学のナゾ、天の川銀河を包むように存在し、星々に巨大な重力を及ぼす正体不明のダークマター(暗黒物質)の研究にも挑戦したい」と話しています。



## ▶ アジア発展途上国における口唇口蓋裂の医療診療隊

口唇口蓋裂は最も頻度の高い先天性顔面形成異常の一つで、アジア発展途上国では、貧困、医療設備や専門医の不足から、多くの患者が手術を受けられずに苦しんでいるのが現状です。

鹿児島大学病院口唇口蓋裂専門外来では、平成6年から口腔外科の川島清美講師らがミャンマーで、口腔顎顔面外科の中村典史教授、西原一秀講師らがベトナムで、日本口唇口蓋裂協会が主催する海外医療ボランティア活動に参加してきました。毎

回100名近い患者が手術を希望して病院を訪れ、1~2週間の滞在期間中に、できるだけ多くの無料手術ならびに現地医療者への技術移転を行なっています。今年12月末に出発する鹿児島大学診療隊には、チーム医療の指導のために看護師も参加することになりました。

アジア諸国における医療や生活の質の格差を改善するために、発展途上国の人材を育成することが我々の重要な役割と考えます。





## ▶ 第2回シニア短期留学を開催

平成19年6月3日から16日までの2週間の日程で、第2回シニア短期留学が開催されました。シニア短期留学とはシニアと呼ばれる年齢50歳以上の方を対象にした生涯教育プログラムです。

前回参加者の感想をもとにプログラムを改定し、新たに来年のNHK大河ドラマ「篤姫」を原口泉生涯学習教育研究センター長が解説する講義などが加わり、全国からも注目され始めた新しい鹿児島の魅力をより深く学ぶ内容となりました。今回から新しく設けられたかごしまルネッサンスアカデミーの受講生を交えた特別セミナーでは、それまで学ん

だ内容をもとに、「地域の見直し」をテーマに鹿児島の魅力や課題について活発に意見が交わされました。

広島県からご夫婦で参加された坂本禮二郎さん(78)玲子さん(75)は「観光としてただ歩いて回るだけでは見えない鹿児島の魅力を学ぶことができました。学生や地元の方々との交流の機会も多くより鹿児島が好きになりました。学ぶことがこんなに楽しいとは思いませんでした。」と話しました。

今回の参加者は県内外合わせて20名。参加者が互いに鹿児島の観光情報などを交換し、話に花が咲く場面も多く見られました。



原口泉センター長による講義「知覧・指宿巡検」。「篤姫」に関して講義を受けた後、篤姫の父・島津忠剛らが眠る今和泉島津家の墓地などを訪れた。



高隈演習林の散策風景

農学部井倉洋二准教授による講義「鹿児島の森は宝の山」。午前中は附属高隈演習林(垂水市)を散策し、午後からは旧大野小学校を利用し地域と鹿大が連携してつくる大野ESD自然学校の紹介や、地元の若者による農業県鹿児島の現状、今後の展望についての話があった。



旧大野小学校での講義風景

## ▶ 「教養教育オープンクラス」を実施

鹿児島大学教育センターでは、去る7月9日から13日にかけて「教養教育オープンクラス ～キャンパス・ライフまるごと授業体験ウィーク～」を実施しました。

この事業は、1、2年生向けの共通教育を1週間市民に開放し、学生と一緒に授業や施設の体験を通じて、大学の教育や研究を学外に発信するとともに、市民の視点から大学教育を点検してもらうことを目的として実施したもので、今回が2回目です。

今回は、主婦や会社員など35名が、鹿児島の歴史と文化などについての「鹿児島探訪」講義シリーズなど、延べ105科目を聴講したほか、図書館、総合研究博物館等の見学や「キャンパス・ウォーク」などにも参加しました。

また、最終日には教育センター教員と参加者との懇談会も行われ、参加者からは、「非常に貴重な体験ができた」といった感想や「もっと双方向の授業形態を採り入れるべきではないか」などの提言がありました。



「英語コアR」の様子

## ▶ 第4回焼酎学シンポジウムを開催



基調講演の様子

9月10日、11日の2日間、鹿児島大学稲盛会館で第4回鹿児島大学焼酎学シンポジウム「夢あるアジアの発酵の世界～九州と四川省・蒸留酒のメッカの酒・食・環境～」が開催されました。このシンポジウムは焼酎学講座の開設を記念し、第4回九州・四川(中国)食品・醸造シンポジウムと第33回日本応用糖質科学会九州支部大会の合同で行われたもの。日本と中国において共に蒸留酒と豊かな食の産地である九州と四川の研究者が集い、アジアの蒸留酒や食について考えていくことがねらいです。

シンポジウムには四川大学の研究者21名を含め、2日間でのべ約300人が出席。1日目は吉田浩己鹿児島大学長、卢晓黎四川大学轻纺与食品学院副院长、菅沼俊彦日本糖質科学会九州支部長のあいさつの後、基調講演が行われました。講師は、農林水産省消費安全局消費・安全政策課リスク管理企画班担当課長補佐の古畑徹氏。古畑氏は「食品安全に関するリスク管理」をテーマに、「安全」と「安心」の定義の違いや、日本の食品安全行政の体制、その施策などについて述べました。その後、2日目にかけて日本の焼酎や中国の白酒、世界の酒などをめぐる幅広いテーマで、鹿児島大学をはじめ四川大学や熊本大学、崇城大学、酒造メーカーなどが11の講演を行いました。

## ▶ 焼酎学講座研究棟「北辰蔵」が完成

7月31日、平成18年4月に開設された寄附講座「焼酎学講座」の研究棟「北辰蔵」が完成し、学内外の関係者約200名が参加して開所式が行われました。

まず、吉田浩己鹿児島大学長のあいさつの後、来賓の本坊喜一郎鹿児島県酒造組合連合会長と庭田清和鹿児島県観光交流局長が研究棟完成に対するお祝いと期待の言葉を述べられました。引き続き、吉田学長と本坊会長による看板上掲、関係者による「北辰蔵」の銘板除幕とテープカットが行われました。

研究棟内部の見学会では、出席者が麹室や発酵室、蒸留機などに熱心に見入り、焼酎学講座の教員に質問をする光景が見られました。研究棟は焼酎蔵をイメージした2階建て。1階に実習用の設備、2階に研究室や実験室を備えています。

農学部の講義室で行われた記念講演会では、鮫島吉廣焼酎学講座教授による同講座設立の経緯や概要、教員の紹介などの説明、原口泉法文学部教授による記念講演「薩摩の歴史と焼酎」が行われ、聴衆は熱心に聞き入っていました。

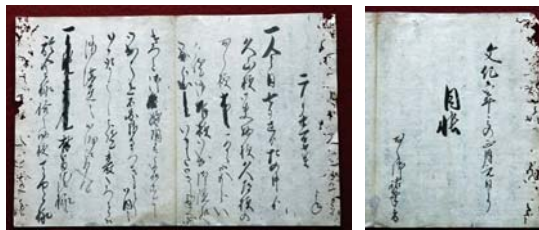


焼酎学講座研究棟「北辰蔵」銘板除幕の様子

## ▶ 裏打ち紙から『越前(重富)島津家奥祐筆日記』発見

このたび附属図書館玉里文庫『誠忠武鑑』(人の部52番箱3281)の裏打ちに使われている紙が、越前(重富)島津家の奥祐筆日記を利用したものであることが、法文学部の丹羽謙治准教授によって発見されました。文化6年(1809)と文化10年(1813)の日記が179枚、日数にしておよそ240日分にもなります。「奥」というのは、将軍家や大名家の当主の夫人が住んでいた空間をいいます。「奥」での毎日の出来事を書記(祐筆)が記録したものが、今回発見されたというわけです。丹羽准教授によると、「薩摩の武家の年中行事や冠婚葬祭の様子、人々の娯楽や信仰などの日常生活がわかる貴重な資料だと思う。近年、『奥』に関して注目

が集まっている。若き日の天璋院篤姫の生活もこの日記から推測することができる」と話しています。なお、本日記は附属図書館貴重書公開「没後120年島津久光 玩古道人の実像」展で、10月の附属図書館での公開に続き、始良町歴史民俗資料館で11月9日から23日にかけて公開されます。



## 必要なのは鹿大の将来像を明確にすることです。

鹿児島大学監事

脇田 稔 氏



監事として初めて鹿大の門をくぐった時に感じたのは、「何て雑然としたキャンパスなんだろう」ということでした。草は生え放題、車や自転車があちこちに放置してある。大学構内の整備をする予算がなかなか取れないという、大学が置かれている厳しい状況を肌で感じました。ただ予算がなくても工夫すればできることはあります。例えば学生や同窓会の力を借りるという発想があってもいいと思います。鹿大は街中にありながら、広大な緑の空間を有し博物館や図書館もあります。これは市や地域住民にとっての財産でもあります。レストラン誘致など夢のある活用策もあっていいし、また隣接のJT跡地には市立病院の移転整備が計画されています。多くの市民がこの財産を享受できるようにという視点で、連携して整備を進めていってほしいですね。

2004年の国立大学法人化から3年が経ちましたが、法人化したという意識がまだ全学に浸透しているとは言い難いようです。組織を構成する一人ひとりが同じ情報、危機感を共有し、鹿大がどう進み、どう生き延びていくかということを考えるべきです。

そのために必要なのは、目指すべき鹿大の将来像を明確にすること。鹿大はこれまで地元の役に立ってきたし、これからも絶対に必要な存在です。しかし、過去の実績だけで将来も生き残れるという保証はありません。今後は、鹿大はこの分野ではどこにも負けない、こういう分野でお役に立ちたいという将来像を明らかにし、それを学内の共通認識としながら、学生や社会にそれをメッセージとして送ってほしい。

個人的には、鹿大の生きるべき道は学生教育をしっかりやることだと考えています。全学一体となり、全教員が等しく教養教育から専門教育に責任をもつ。さらに、学生の悩みや健康、留年、就職といったことまで幅広くカバーする。社会に出ても立派に通用する学生の教育に全学を挙げて取り組んでいる、という鹿大の姿勢を示すことで、鹿大の存在意義を社会に発信していってほしいですね。

わきた・みのる／昭和18年生。鹿児島大学文理学部卒業後、鹿児島県庁に入庁。鹿児島県副知事を経て、平成18年4月から鹿児島大学監事。

### ▶ キャリアコンサルタントによる本格的なキャリア教育実施



現代GP\*の採択を受けた法文学部では、昨年度から実施中の「キャリア科目」（地元企業・自治体等の現場の話から職業意識を高める）に加え、今年度から、キャリアデザインを創り上げ、生涯にわたって主体的にキャリア形成する能力を育成することを目標として、実務家（キャリアコンサルタント）による「キャリアアップ科目」を開講しています。

今年度前期に開講されたキャリアコンサルタントの梶原宜俊氏による講義では、学生が、梶原氏が独自に開発した『カード式キャリアデザイン法』を使った図解により職業人としての自分をイメージし、その目標実現に向けたキャリア開発計

画の作成等を通じて、キャリアビジョンの形成を図りました。学生からは、「就職目標が明確になり、意欲や自己表現力・情報活用力・行動力が高まった」という意見が出るなど好評で、今後も引き続き法文学部では、実践的キャリア教育の充実を図ることとしています。



\*現代GP … 平成18年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」。  
法文学部の『地域マスコミと連携した総合的キャリア教育』が採択された



### ▶ かがしまルネッサンスアカデミー 平成18年度事業報告会を開催

8月11日、かがしまルネッサンスアカデミーの「平成18年度事業報告・第二期受講生募集説明会」が鹿児島大学稲盛会館にて開催されました。かがしまルネッサンスアカデミーは平成18年度文部科学省・科学技術振興調整費に採択された人材育成プログラム。鹿大と地域が共同で、鹿児島県の食品産業や関連業界、鹿児島県全体の活性化を目指し、人材の教育にあたっています。

当日は各コースの概要や受講生の声を紹介された後、砂田向杏文部科学省産学官連携広域コーディネーターによる基調講演「再生人材の品質保証」やパネルディスカッション、第二期受講生募集説明が行われました。



### ▶ 学長諮問会議を開催

鹿児島大学では、去る9月7日、学長諮問会議を開催しました。これは、本学に関する重要事項に係る学長からの諮問に対し、助言等を行うために新たに組織されたものです。委員は、伊藤祐一郎鹿児島県知事、稲盛和夫京セラ(株)名誉会長、江口正純鹿児島大学同窓会連合会会長、大西洋鹿鹿児島商工会議所会頭、大野芳雄(株)鹿児島銀行取締役会長、中村晋也崇城大学副学長(鹿児島大学名誉教授)、水溜榮一(株)南日本新聞社代表取締役社長、森博幸鹿児島市長、山元強鹿児島テレビ放送(株)代表取締役社長、米盛學鹿児島県医師会会長の10名。

会議では、吉田浩己学長が、本学の現状のほか、11月制定予定の「鹿児島大学憲章」策定の趣旨等について説明の後、渡部賢財務・環境担当理事から財務状況の説明がありました。続いて、今後の大学の在り方等について種々意見交換がありました。

### ▶ 文科省教育推進プログラムに教育学部と農学部のプログラム採択

文部科学省の平成19年度「専門職大学院等教育推進プログラム」(大学院等における教員養成の教育の充実)に、教育学部の「生きる教師力を育む特別支援学校教員養成」が選定されました。

本事業は、鹿児島大学が主幹大学となり、琉球大学及び鹿児島、沖縄両県の教育委員会が連携して実施するので、「特別支援教育のためのカリキュラムの充実」、「地域と連携した特別支援教育プログラムの開発」、「オンラインポートフォリオ\*と補習メディアシステムの構築」の3つの方略を柱とする自己点検と資質向上のための「生きる教師

力」の醸成により、理論と実践を調和させ、在学期間中にとどまらず、卒業後も教員としての資質を向上させるための体系的な教育プログラムです。

また、「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」に、農学部の「高度林業生産システムを実現する『林業生産専門技術者』養成プログラム」が採択されました。

本事業は、木材の量的・安定的生産が求められている中で、総合的・経営的能力を有した林業生産管理の専門技術者を養成するプログラムで、本学のノウハウとネットワークを活かした講義、現地研修・実習を行う予定です。

\*「オンラインポートフォリオ」：ネットワークを通して読み書きできる学びの履歴

### ▶ お知らせ

<訂正・お詫び>  
175号特集「焼酎学講座」P.5中に「日本政策投資銀行九州支店」とありましたのは「日本政策投資銀行南九州支店」の誤りでした。訂正してお詫びいたします。

<職員の給与水準等について>  
本学の役員報酬・職員給与水準(平成18年度)等について、本学ホームページで公表しています。  
<http://hh.kuas.kagoshima-u.ac.jp/jkoukai/johokoukai.htm#jyohoteikyo>



●鹿児島大学の使命  
問題はかりが取り上げられがちな「離島へき地」だが、その地域ならではの教育、医療、独特の生活が息づいている場所でもある。これからは鹿大が総合大学の視点と人材を生かし、問題解決と同時に離島へき地の良さを発信していくこと使命の一つとなるかもしれない。

南北600キロメートルに及ぶ鹿児島県には離島へき地が数多くあり、このような地域にある大学として、本学は教育、研究、社会貢献にわたって、離島へき地のさまざまな問題の解決に積極的に取り組んでいます。本号ではその代表的な事例を紹介しましたが、本学が開発し、蓄積した方法論は、同様の環境にある日本および世界の各地域における問題解決の指針となり得るものと自負しています。

本号14頁と16頁の最初の記事とを合わせ読みますと、教員が不断の研究を基盤に学生を教育すること、それが優れた人材を養成することになるという、大学教育のあるべき姿を肝に銘じることの必要性をあらためて感じます。

「鹿大への提言(19頁)」という新コーナーを設けました。御提言を真摯に受け止め、常に改善に努めたいと思っております。

広報誌等編集専門部会部会長  
中島あや子

### 編集後記

